



オールドニュータウンを「活かす！」道筋を提言。 武庫川女子大学三好教授が本を出版しました。

ニュータウンの計画・設計・研究に長年取り組んできた武庫川女子大学生活環境学部長・研究科長の三好庸隆（つねたか）教授が、『オールドニュータウンを活かす！—理想都市の系譜から多様な暮らし方の実現へ』（大阪大学出版会）を出版しました。12月20日から全国の書店で発売されます。

近代ニュータウンのルーツである理想都市の源流からハーワードの田園都市論、第二次世界大戦以降のニュータウンの歴史を日本と海外を比較しながら俯瞰。全6章から構成され、「第3章 挑戦する明舞団地」では、兵庫県最古のニュータウンである明舞団地の活性化に向け、三好教授自身が関わった様々な試みを詳述しています。ニュータウンの現状に悩むすべての関係者に新たな視座を提示し、具体的な取り組みの“手引書”となる一冊です。

戦後の住宅ニーズに応じて各地で開発された日本型ニュータウンは、全国で2022地区、総事業面積は大阪府の面積に匹敵する18.9万ヘクタールに上るとも言われ、その多くのニュータウンが少子高齢化によって「オールド化」しています。本書では買い物難民、空き家問題、住宅や施設の老朽化などネガティブな面がクローズアップされがちなニュータウンを再評価。郊外再編とオールドニュータウンの、暮らしの活性化に向けて具体的なビジョンを提言します。関西のニュータウンにスポットを当てている点も特色です。

第I部では19世紀、イギリスのハーワードが提唱した「ガーデンシティ（田園都市）」に始まる世界の「ニュータウン」の系譜を概観します。日本では、本格的なニュータウンが現れたのは戦後になってから。1962年の千里ニュータウンが第1号とされています。以後、各地

で大小のニュータウンが開発されましたが、その多くが少子高齢化とともにオールド化の道をたどっています。

第Ⅱ部では日本のニュータウンにフォーカス。事例として、明石市と神戸市にまたがる明舞団地の取り組みを紹介。兵庫県と兵庫県住宅供給公社が事業主体で1964年に入居を開始した県内最古のニュータウンです。三好教授は2006年度の「明舞団地再生コンペ」で最優秀賞を受賞して以来、継続的に明舞団地の活性化に取り組んでいます。

オールドニュータウンには「住環境のリフォーム」「在宅医療・介護」「子育て環境の整備」「デジタル時代の郊外住宅地のあり方」など、社会課題解決に向けての潜在的市場があると三好教授は指摘し、再生ではなく「活かす！」発想が必要と訴えます。オールドニュータウンを活かすビジョンとして、「コミュニティ力の強化・まちの魅力強化」「多様な担い手を育てる」「都市圏中心部と新たな補完関係・共創関係を形成する」など5つのビジョンとビジョンごとの取り組むべき事項を32のTO DOリストに纏めて列挙し、最後に現場の声にQ&Aで答えています。

三好教授は「日本版ニュータウンはかつて輝いていた。それをたかだか50年くらいでオールドニュータウンと嘆くのはいかがなものか。日本の地方創生や魅力的郊外形成のために、“活かす！”という発想で取り組むべきで、産官学が総力を集結して、新しいライフスタイル、新しい地方、新しい郊外のあり方を検討し、様々な生活密着型ビジネスの参入を呼び込む仕掛けをすべきだ」と話しています。



この件に関する取材のお申込み、お問い合わせは武庫川女子大学広報室

Tel 0798-45-3533

E-mail kohos@mukogawa-u.ac.jp

へお願いします。